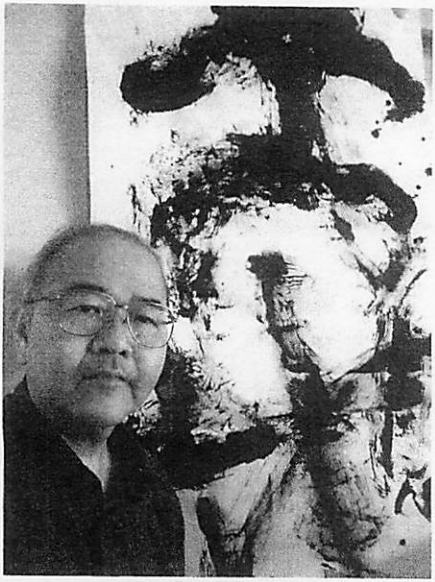
「熊本大地震」を書く

神野　雄二（大光）

平成二八（二〇一六）年四月一四日二一時二六分・一六日一時二五分、熊本を大地震が襲った。私の家はまさに震源地・熊本地方にあった。

ドンと突き上げる音が、熊本大学書道室に轟いた。

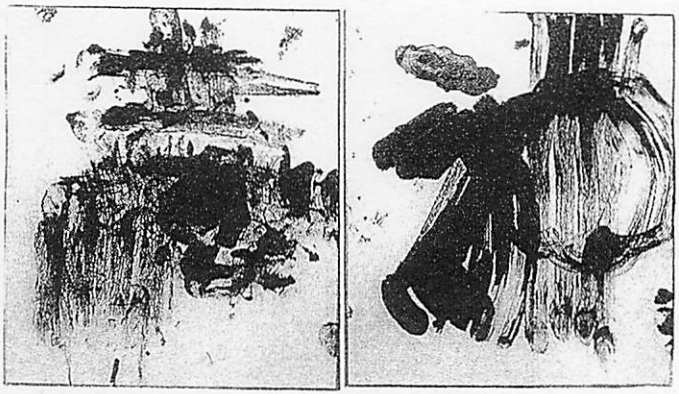


1、『天地』作品の前で、作家

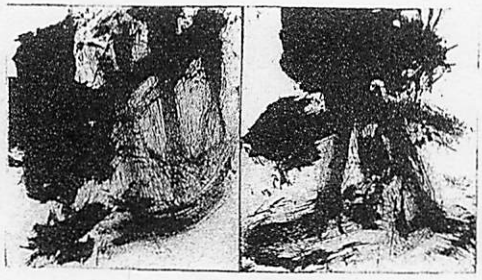
私は、ちょうど新学期を迎え、授業の準備や、部屋の片づけをしていた。机の上にいたが、座り込んだ、というより倒れ込んだ。ドンという音以外、揺れのことは多くを覚えていないが、一瞬すべてのことは止まったと感じた。胸騒ぎがし、自宅に電話をいれたが、通ぜず。のちに家内から電話があった。家具・食器棚・本棚が倒壊し、悲惨な状況であるらしい。余震が続いており、信号機も止まり、すぐには家に帰れなかった。しばらくして家路につく。

家に入るや、これはただごとでないと直感した。二階に上がると家具はすべて倒壊し、茶碗やコップは砕け散っていた。家内は座り込んでメールをうっていた。一階の書庫・勉強室も本が散乱していた。

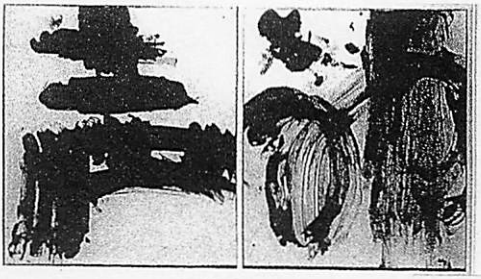
その夜は二階の廊下で眠った。次の日、もう余震も収まるだろうと、風呂に入り眠りについた。翌朝未明、地震はまたも熊本地方に襲いかかった。一瞬のうちにすべての電気は消えた。揺れは半端でなく、懐中電灯を持って外へ飛び出した。近所の人たちも



2、「神声Ⅰ」



4、「天地」



3、「神声Ⅱ」

ぞろぞろと出てきた。

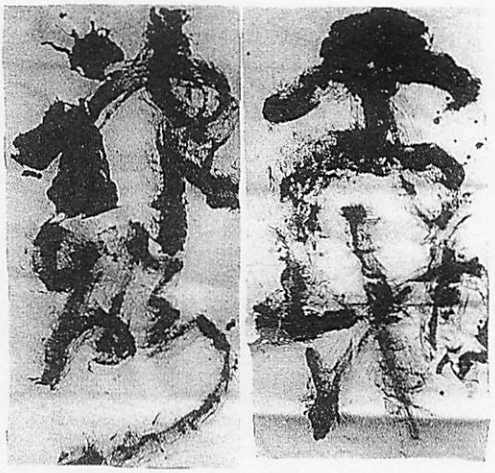
避難所となった江原中学校に行ったが、運動場にパイプイスが並べられ、数百人の人が座っていた。まさに異様な光景であった。この夜はさすがに家で寝れず、車中泊となった。家の中は、もう手の付けられない状況であった。

被災、まさかこの熊本で。災害が少ない自然豊かな熊本で。水道・ガスは止まった。この時、水は命と思った。食料はなく、避難所でもらい命を繋いだ。

一八日、大学の様子が心配で家内と出かけた。研究室と書道室は本が飛び出したくらいで、大きい被害はなかった。

無性に書が書きたくなり、色紙に数点殴り書きした。掲載の2から4の作品である。

二二日、熊本大学書道室へ行き、どうしても心の高ぶりを抑えられず、今しか書けないと、二〇枚くらい書いた。5から7の作品である。8は五月二日の作。これは書というより、物体と言った方がよいかもしれない。大地震が私に与えた、天の声に導かれての書。怒りである、何に向かっての怒りかなど分からない。書法もへったくれもない。ただ筆に墨をつけ、ひたすら書きなぐった。印は捺すと、単なる作品にな



5、「天地神声」



6、「熊本大地震Ⅰ」



7、「熊本大地震Ⅱ」

ると思い、下の方に書いた日付と名前を記録として残すこととした。

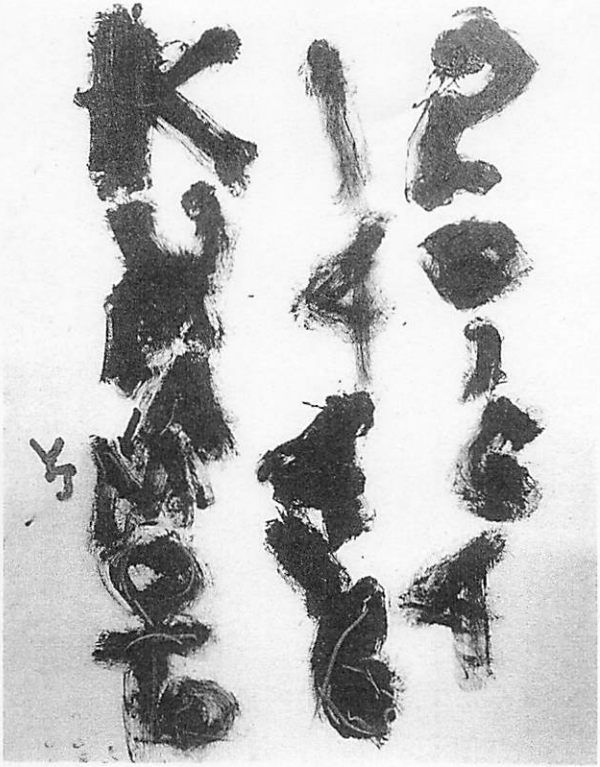
これはもう二度と書けないもの。またつれづれに思い浮かんだ言葉を併せて掲載する。

このたびの熊本大地震は、多くの教訓を残してくれた。評論家で日本近代史家の渡辺京二先生は「熊本日日新聞」の四月二八日付の「荒野に泉湧く」で、「私自身気づいてみると、街ですれ違う人に、大変だったでしょうと自然に声を掛けていた。私が『逝きし世の面影』で描いたあの人なつこい日本人、人情溢れる日本人が帰って来たのだ。…中略…それでも私たちが、何かきっかけをつかんだのは確かだ」と。実は私も同じことを感じていた。私自身に自然に相手を思いやる心が開かれていた。避難所を見舞い、近所の一人暮らしの方や病気の人を可能な限りで手助けさせてもらった。

また被災ゴミの山の写真が撮りたくなり、一〇〇コマあまり撮った。自分の写真に感動したのは初めてといってよい。とにかく撮った。ここに作品の若干の解説をする。

1、『天地』作品の前で、作家」

2、「神声Ⅰ」（手筆による手書である）（色紙二枚）



8、
「熊本大地震
（油書Ⅰ）」

『熊本日日新聞』の四月二五日付で文化欄に掲載されたものである。文は詩人の伊藤比呂美氏。筆を持つのもままならず。手に墨を付け、必死で書いた。

3、「神声Ⅱ」（手筆よる）（色紙二枚）
1と同様、手に墨を付け書いた。書いたというより刻んだ。

4、「天地」（被災筆による）（色紙二枚）
地震でころがっていた被災筆をこすりつけるようにして書いた。天地創造の神への怒りである。

5、「天地神声」（馬毛筆による）（全紙二幅）
「天地神声」は作家の造語で、熊本地震の天地を揺り動かす、ドーンとの神の声（音）である。床に這いつくばって、ただ無心で書いた。

6、「熊本大地震Ⅰ」（２０１６４１４４１６ドーンドーン）（全紙）
作家が、独創による表現として取り組んできている、歴史的年月日を揮毫する「歴史数字書」（著者命名）による作品である。「歴史数字書」とは、歴史的に重大、また印象深い出来事・事象が発生した年月・日時の数字そのものを素材にして表現した作品の

ことをいう。（注1）

7、「熊本大地震Ⅱ」（２０１６４１４４１６クマモト）（半切）

8、「熊本大地震（油書Ⅰ）」（２０１６４１４４１６ＫＵＭＡＭＯＴＯ）（油書・キャンバス・五〇号）

作家が「油書」（Ｏ・Ｋ）と名付けたものである。書の世界ではあまり手掛けられていない手法である。今後可能性を持っているといえよう。

熊本大地震

来た
来た
大地震
２０１６年４月１４日Ｍ６・５　１６日Ｍ７・３
熊本に

熊本城は崩壊
阿蘇山も噴火
民家は倒壊

ドン
ドーン

これは　神の大音声か
書いた書いた　むちゃくちゃ作品
手に墨つけ
熊本大地震　何するものぞ
被災場所　熊本大学書道教室

ああー
何もかも破壊し尽くす自然の猛威
おまえは　何に怒り狂っているのか

おさまれ
おさまれ
天地
神の声

また来た
また来た

（じんの　ゆうじ／熊本大学教授・全国大学書道学会理事）

【注1】

『神野大光の世界―書・篆刻作品集―』（創想舎出版、二〇一三年三月三一日）

『書写書道教育論考』（創想舎出版、二〇一五年三月三一日）に、同テーマの作品を掲載する。